

連載

信州大学教育学部

友川 幸

「ほら、まっすぐ立って、かかとを壁につけて」。写真は、ラオスの小学校での健康診断の様子である。生まれて初めての体重計に、恐る恐るの様子の子どもたち、身長計のメモリが正確に読めない先生たち。ラオスでは、学校で健康診断が行われるシステムがない。そのため、大人であっても自分の身長、体重を知らないことが珍しくない。

ラオス政府は、2010年に、学校で行うべき保健サービスのひとつとして、子どもたちへの健康診断活動を挙げた。しかしながら、その実践の方法や収集したデータを評価する方法が確立しておらず、その実現を困難にさせていた。この背景のもと、私たちの研究チームは、ラオス国立大学の教育学部の協力により、2010年からラオス各地の教



体重測定の様子

ていない。子どもたちが、長期的に不健康で栄養不良の状態に晒されることは、健全な成長や発達を阻害するだけでなく、学力不振や早期退学にも関連するのである。

ラオスでは、2005年に学校保健政策が策定され、学童期の子どもたちを



身長測定の様子

学校保健の活動を推進していくことのできる人材を養成することを目指している。また、教員養成校および附属の小・中学校で実際の健康診断活動を行うことによって、ラオスの教育現場でうまく機能するモデルを開発するこ

教師が行う学校での健康診断は、 ラオスの子どもたちの健康を守る第一歩 —教員養成校を拠点とした学校での健康診断システムの開発

員養成校とその附属学校で健康診断の活動を行っている。健康診断では、研修を受けた学校教員や教員養成校の学生が、子どもたちの身長、体重の測定と視力、聴力の検査を行っている。また、研修では、健康診断の方法に加えて、健康診断の重要性に関する講義や学校現場での測定実習を行っている。

ラオスは、東南アジアに位置する開発途上国であり、アジアの中でも特に、教育や保健のサービスの普及が遅れている。多くの子どもたちが深刻な栄養失調状態にあることが指摘されているが、その実態は十分に明らかにされ

ターゲットに、学校を拠点として、保健サービスや健康教育が提供されている。私たちの研究では、学校保健普及のボトルネックのひとつは、学校保健活動に関する学校の教員のやる気と知識の不足であることが分かった。これらの不足は、教員自身が学校保健のサービスを受けた経験がない、また、教員養成校でも学校保健に関する指導がなされていないことなど、“経験”の不足によって生み出される。

現在進めている研究プロジェクトでは、教員養成校で学ぶ将来の教師の卵たちに健康診断を経験してもらうことで、学校保健活動の意義を理解し、

とを目指している。毎回の研修には、日本の大学生も参加し、言葉や文化、習慣の違いを肌で感じ、当たり前が当たり前でない現状から、多くのことを学んでいる。

現地での活動は、はじめの一步を踏んだばかり。ラオスでの全国展開を鑑みた時、身長計や体重計などの入手の問題、データの記録・保管の問題、健康診断データの保護者との共有など、課題は多い。小さな一步ではあるが、教師が行う学校での健康診断が、ラオスの子どもたちの健康を守る第一歩となるように、これからも頑張っていきたい。

友川 幸
(ともかわ・さち)

大学院の修士課程で開発途上国の教育開発を学び、在学中にJICAの青年海外協力隊事業に参加し、西アフリカのニジェールで学校保健活動の普及に当たる。その後、博士課程では保健学を専攻し、ラオス南部の農村部で子どもの寄生虫感染に関するフィールド研究を行う。2009年よりラオス国立大学教育学部との共同研究を開始。2010年より信州大学教育学部助教。